

平成 21 年 6 月 1 日現在

研究種目：基盤研究(B)  
 研究期間：2005～2008  
 課題番号：17320056  
 研究課題名(和文) 20世紀東アジア文学史における村上春樹の研究  
 研究課題名(英文) The Study On MURAKAMI Haruki In The History Of The 20th Century East Asian Literature

研究代表者  
 藤井 省三 (FUJII SHOZO)  
 東京大学・大学院人文社会系研究科・教授  
 研究者番号：70156818

研究成果の概要： 東アジアの 20 世紀とは一世紀遅れで欧州の国民国家形成を追うものであり、21 世紀の今日における 20 世紀東アジア文学史の構想は、東アジア・アイデンティティ形成に対し大きな意義を有する。20 世紀東アジアに巨大な影響を与えた現地作家を二人挙げるとしたら、それは魯迅と村上春樹であろう。本研究は東アジア・アメリカの八地域・国家の合計 12 名の比較文学研究者が結集して共同研究を行い、現代東アジア文学史に村上を位置づけたことが、主な成果である。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	2,400,000	0	2,400,000
2006年度	2,100,000	0	2,100,000
2007年度	2,400,000	720,000	3,120,000
2008年度	2,800,000	840,000	3,640,000
年度			
総計	9,700,000	1,560,000	11,260,000

研究分野：現代中国文学映画

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：国際研究者交流、東アジア文学史、村上春樹と中国、村上春樹と台湾、村上春樹と香港、村上春樹と韓国、村上春樹とシンガポール、村上春樹とマレーシア

## 1. 研究開始当初の背景

中国語圏で村上春樹の熱狂的受容が始まるのは、『ノルウェイの森』が1989年に台湾で翻訳されたのがきっかけであり、この「村上現象」は台湾で「非常村上(すっごくムラカミ)」という流行語を生み出しつつ、2年後の香港版新訳刊行、90年代末以後の中国版翻訳の上海・北京での大流行へと展開した。

このように東アジアを台湾 香港 上海 北京と時計回りに展開した「村上春樹現象」が、台湾と香港では20年来続いた高率の経済成長が半減する80年代後半を受けて生じており、中国でも1992年改革・開放政策再加速後の高度経済成長が陰りを見せ始める90年代末に生じたものであり、東アジアにおける村上春樹の受容とは、都市文化成熟度のメル

クマールであった。

また韓国における村上受容を中国語圏における受容と比較研究することも、重要なテーマと考えられた。

そのいっぽう、村上春樹は中国を凝視する作家であり、短編「中国行きのスロウ・ポート」(1980)以来、村上は中国を自らの中心的課題として選び取ってきた。テーマとしての中国は「満州国」の亡霊を描いた『羊をめぐる冒険』(1982)、『ねじまき鳥クロニクル』(1995)へと発展しており、当時最新作『アフターダーク』(2004)の語り手は、中国語専攻の女学生と新宿のラブホテルで日本人男性客に暴行された中国人娼婦とを登場させていた。

## 2. 研究の目的

本研究は中国・香港・台湾・シンガポール・マレーシア・韓国・アメリカそして日本の文学芸術研究者が結集し、東アジアに対する村上文学の影響を明らかにすることを目的とした。またアメリカにおける村上受容を参照軸として設定し、村上春樹の東アジアの歴史の記憶に関する研究を日本の日本文学研究者が担当した。

## 3. 研究の方法

(1) 2005年度には、研究代表者は中国・香港・台湾・シンガポール・マレーシア・韓国・オーストラリア・米国の主要な研究機関に所属する現代東アジア文学研究者らを研究協力者に依頼して研究チームを組織し、E-Mailを活用して『ニュースレター・東アジアと村上文学』を定期発行するいっぽうで、中国・香港・台湾・シンガポール・オーストラリアに出張し、研究交流・資料収集・講演活動を行った。また研究協力者のうち米国より Faye Kleeman 副教授を学術振興会を通じて東大文学部外国人研究員として受け入れ、韓国より

金良守副教授を東大教養学部外国人研究員として受け入れるよう助力した。また研究代表者は国際交流基金主催の国際シンポ&ワークショップ「春樹をめぐる冒険 世界は村上文学をどう読むか」(2006年3月25、26日東京、29日札幌)にもアドバイザーとして協力した。

(2) 2006年度には研究代表者は中国・香港・台湾・シンガポール・マレーシア・韓国・米国の主要な研究機関に所属する現代東アジア文学研究者らの研究協力者から構成される研究チームを率いて、E-Mailも活用して『ニュースレター・東アジアと村上文学』を定期発行するいっぽうで、中国台湾に出張し、研究交流・資料収集・講演活動を行った。また研究代表者は東大中文・台湾大学台湾文学研究所共催の現代文学研究国際ワークショップ

(2006年6月28日~7月3日、台北・台湾大学)、東大中文・韓国中国現代文学学会共催の東京ソウル中国現代文学国際ワークショップ(7月14~18日、東京大学)を開催した。

(3) 2007年度には研究代表者は研究チームを率いて、『ニュースレター・東アジアと村上文学』を定期発行するいっぽうで、アメリカ、台湾、香港、中国に出張し、研究交流・資料収集・講演活動を行った。研究協力者の許金龍、葉蕙を国際交流基金を通じて、于桂玲を黒竜江政府を通じて東大文学部外国人研究員として迎えた。研究代表者は葉・于両氏のほか研究協力者の楊炳菁、呉耀宗、関詩珮、張明敏、金良守、任明信、Faye Kleeman、島村輝の協力を得て10月に東大文学部において3日間のワークショップを開催した。12月21日には香港嶺南大学中文系主催のシンポ「香港文學的定位」で報告「香港人心目中的村上春樹」を、3月18日には北京師範大学日語系主催のシンポ「村上春樹の中国語訳一日中(中日)外国文学研究者による共同研究」で基調報告「日本文化の土着化と中国本土文

化の变革」を行った。中間的報告書として『村上春樹のなかの中国』を朝日新聞社より刊行した。

(4)2008年度には研究代表者は日本・中国・香港・台湾・シンガポール・マレーシア・韓国・米国の研究機関の現代文学研究者らから構成される研究チームを率いて主に二種の活動を行った。

シンポジウム開催：許金龍以下昨年のワークショップ招聘の研究協力者および中国語圏の村上二大翻訳家の頼明珠と林少華を招聘して、11月1日に東京大学山上会館でシンポ「東アジアと村上春樹」を開催し、『文學界』にシンポ報告を發表した。研究報告論文集刊行のための編集作業を行い、MURAKAMI Haruki STUDY BOOKSの版元の若草書房より平成21年6月に総367頁の論文集『東アジアが読む村上春樹』を刊行した。

#### 4. 研究成果

本研究課題の主な成果は以下の報告書二点に集約されている。

(1)『村上春樹のなかの中国』(藤井省三著、2007年)

本書第一章「村上春樹のなかの中国」では村上に対する魯迅の影響および村上における日中戦争という歴史の記憶を解明した。

第二～四章「台湾・香港・中国のなかの村上春樹」では、四大法則を中心として台湾・香港・中国における村上受容二〇年の歴史を、翻訳出版状況から批評や一般読者の反響にまで踏み込んで解明した。

第五章「にぎやかな翻訳の森」では、中国・香港・台湾各地で刊行されている中国語訳を比較検討し、各訳者が編み出した独自の翻訳文体や、翻訳ミスなどの文化的背景を探った。

第六章「東アジアにおける「阿Q」像の系譜」では、魯迅から村上春樹、そして香港の映画監督ウォン・カーウァイ(王家衛)へと至る「阿Q」像の系譜をたどりながら、現代

東アジア文化史草案を構想した。

(2)『東アジアが読む村上春樹』(藤井省三編、金良守ほか共著、2009年)

金良守論文「韓国における村上春樹の受容とそのコンテクスト」は、戦後韓国における日本文学受容史から説き起こし、『森』をめぐる「軽薄」論争により浮き彫りにされた韓国文学の危機、そして『海辺のカフカ』の歴史認識とこれに対する韓国社会の反響、そしていわゆる「386世代」から「ロウソク」世代への村上読者層の変化を論じている。

張明敏論文「台湾における「文化翻訳」としての村上春樹現象」は、1985年に世界初の村上文学外国語訳を刊行した台湾が、四半世紀にわたり村上春樹をより広く深く村上を受容していく過程を五期に分けて文化的視点から分析したものである。

関詩珮論文「知識生産の領域と村上春樹の香港における普及」は中国と台湾との「兩岸」に夾まれた香港が、90年代初期にいち早く海賊版ではない著作権取得版の村上文学中国語訳を刊行しつつ、現代的読書市場を形成していく過程を、日港出版界の人々へのインタビューも交えつつ、文化的視点から論じている。

楊炳菁論文「文学翻訳と翻訳文学」は、世界最大の村上翻訳家である中国の林少華氏の訳業を、「帰化(domestication)」と「異化(foreignization)」の視点から分析している。

于桂玲論文「中国版『ダンス・ダンス・ダンス』(以下『ダンス』と略す)の版本研究」は、1991年の中国で相次いで刊行された3種類の『ダンス』中国語訳を、精査比較し、各翻訳の特徴・問題点について検証を行っている。主人公「僕」の愛車スバルや少女「ユキ」が喫うバージニア・スリムなどブランド名の消失現象から、中国人にとっての村上受容の意味を読み解いた。

許金龍論文「中国において村上春樹と大江健三郎を考察する」は、大江と村上を両極として現代日本文学地図を作成しようと試みる加藤典洋氏の評論集『文学地図 大江と村上と二十年』（朝日選書）に通じる。

Gabriel WU（呉耀宗）論文「線言あるいは逆写」は、本来小規模な読書市場がさらに英語と中国語の市場に分割され、世界でもトップクラスの先進国でありながら国民のほとんどが高層公営住宅に住み、家族制度を重視するという都市国家シンガポールの国情から生み出された特有の村上読みを紹介している。

葉蕙論文はマレーシアにおける村上受容をレポートした。中国系マレーシア人の彼女が一九九〇年代初期に香港版『森』『羊』『ダンス』三冊を中国語訳した経緯については、前述の関詩珮論文に詳しい。

Faye KLEEMAN（阮斐娜）は台湾・蘇州大学日文系を卒業後、お茶の水女子大学に留学、さらにカリフォルニア大学で大江、中上健次および倉橋由美子の研究により博士号を取得、現在はコロラド大学東アジア言語文化学部の副教授である。主著に Under an Imperial Sun: Japanese Colonial Literature of the South（邦訳『大日本帝国のクレオール植民地台湾の日本語文学』慶大出版会）がある。東アジア村上受容研究の参照軸としてアメリカを考えると、彼女こそ最適の人材といえよう。

島村輝論文は日本・中国・韓国の一部の研究者が「歴史隠蔽」と批判する『海辺のカフカ』の日本における評価を冷静に論じた。

以上の研究協力者のほかに、ゲストとして台湾と中国を代表する村上翻訳家の頼明珠と林少華に独自の村上論を語るエッセーを寄稿していただいた。

5．主な発表論文等  
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線）

〔雑誌論文〕（計 10 件）

藤井省三、村上春樹の中国語訳：日本文化の土着化と中国本土文化の変革、日語学習与研究（北京）、第 140 号、2009 年 2 月 25 日、111 -117 頁、査読有り

藤井省三、東アジアが読む村上春樹 東京大学シンポジウム、文學界、2009 年 1 月号 220 -233 頁、査読無し

藤井省三、中国の村上チルドレンと村上春樹小説の「家族の不在」：衛慧、アニー・ベイビーにおける「小資」文学の展開をめぐる、ユリイカ、2008 年 3 月号、168 -177 頁、査読無し

藤井省三、日本の香港文学：従 10 年来研究 与 介紹的變遷談起、香港・『香港文学』271 号、2007 年 7 月 1 日、13 -17 頁、査読有り

藤井省三、村上春樹裡面的中國：以 雪梨的綠街、開往中國的慢船、《聽風的歌》三篇小説爲主、台北・政治大学『台湾文学學報』第 10 期、2007 年 6 月、3 -17 頁、査読有り

藤井省三、中国語圏における村上春樹の受容、東亜、2006 年 10 月号、10 -17 頁、査読無し

藤井省三、開往中国的村上慢船：村上春樹在中国以及中国在村上文学、梁秉鈞・許旭 jun〔竹+均〕主編、『東亜文化與中文文学』香港・明報出版社 2006 年 2 月、2 -24 頁、査読有り

藤井省三、村上春樹在東亜：都市現代化標志的文学、書城（上海・三聯書店）、2005 年 9 月号、52 頁、54 -57 頁、査読無し

藤井省三、ポスト鄧小平時代の文学における“絶対村上”と“反日”の情念、すばる、2005 年 8 月号、137 -141 頁、査読無し

藤井省三、中国・香港・台湾と村上春樹、呉密察・黄英哲・垂水千恵編『記憶する台湾』

東大出版会、2005年5月、177-195頁、査読無し

〔学会発表〕(計5件)

藤井省三、村上春樹の中国語訳：日本文化の土着化と中国本土文化の変革、村上春樹の中国語訳シンポ、北京師範大学日文系、2008年3月18日

藤井省三、魯迅與村上春樹、王家衛：東亞文學、電影中“阿Q”形象的系譜、東京大學高麗大學共同主催日本語學・日本文學・中國文學國際學術研討會、2008年2月19日、東京大學文學部

藤井省三、香港人心目中的村上春樹、香港文學的定位論題及研究シンポ、香港・嶺南大學康樂樓會議中心、2007年12月21日

藤井省三、The Reception of Murakami Haruki (Cun-shang Chun-shu) in Taiwan、TAIWAN AND ITS CONTEXTS、Yale University、2007年4月27日

藤井省三、村上春樹裡面的中國：以雪梨的綠街 開往中國的慢船 《聽風的歌》三篇小説為主、台灣文學藝術與東亞現代性國際學術研討會、台北・政治大學、2006年11月12日

〔図書〕(計4件)

柴田元幸、沼野充義、藤井省三、四方田犬彦共編、文藝春秋、世界は村上春樹をどう読むか、2006、316頁

藤井省三編、若草書房、東アジアが読む村上春樹、2009、367頁

藤井省三(張明敏訳)、時報出版(台北)、村上春樹心底の中国、2008、269頁

藤井省三、朝日新聞社、村上春樹のなかの中国、2007、269頁

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

図書 に対する 2009年の紹介：中国・東方早報4月1日、同・新聞晨报4月1日、同・中国経営報4月10日、同・城市画報5月12日、香港・明報5月29日

図書 に対する 2008年の書評：台湾・中国時報8月4日ほか。

図書 に対する 2007年の書評：日本経済新聞7月16日、読売新聞7月24日、毎日新聞8月5日、東京新聞8月12日、朝日新聞8月26日ほか。

2008年11月シンポに関する報道：毎日新聞11月12日夕刊、東京新聞11月17日夕刊、NHKラジオ国際放送11月16日波短情長ほか。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤井 省三 (FUJII SHOZO)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授  
研究者番号：70156818

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし

(4) 研究協力者

張明敏 (CHANG MINGMIN)

清雲科技大學・應用外語系・兼任講師

阮斐娜 (FAYE KLEEMAN)

コロラド大学・東アジア学部副教授

関詩珮 (UGANDA KWAN)

南洋理工大学・中文系・助理教授

呉耀宗 (GABRIEL WU)

香港城市大学・中文系・副教授

任明信 (IM MYOUNG - SHIN)

ソウル大学・基礎教育院・専任講師

金良守 (KIM YANG - SU)

東国大学・中文系・副教授

島村輝 (SHIMAMURA TERU)

女子美術大学・大学院芸術表象系・教授

許金龍 (XU JINLONG)

中国社会科学院・外国文学研究所・教授

楊炳菁 (YANG BINGJING)

北京外国語大学・日文系・専任講師

葉蕙 (YAP YUET - NGOR)

筑波大学・大学院日文科博士課程・大学院生

于桂玲 (YU GUILING)

ハルビン工業大学・日文系・副教授